

1 ながしきけじゅうたくおもや 長鋪家住宅主屋、うちぐら 内蔵、うちもん 内門

(1) 所在地 こうのしま 笠岡市 しるかた 神島字汁方

(2) 所有者 個人

(3) 概要 神島北東の高台に位置する旧家。長鋪家は廻船業や塩田の開拓によって栄え、江戸末期より神島で代々庄屋を務めた名家である。敷地は東西に長い形状で、敷地中央からやや西側に寄って東西棟の主屋が建ち、主屋南側の、庭を挟んで一段高い敷地に土蔵を建てる。この庭を東西に分けるように南北棟の内門を建てる。

主屋は平屋建の東西棟で、西寄りが入母屋（いりもや）造本瓦葺で三方に下屋（げや）を付し、東寄りは切妻造棧瓦葺（きりづまづくりさんがわらぶき）とする。江戸末期に建てられたと伝えられる。大正前期に西側の屋根を茅葺から本瓦葺に、昭和 49（1974）年に東側の屋根を棧瓦葺に改修した。

内蔵は二階建切妻造本瓦葺の東西棟。北側を戸口として庇を付け、窓は二か所開ける。外壁は漆喰塗仕上げで、部分的に海鼠（なまこ）壁を用いている。建築年代は主屋と同時期の江戸末期と推定される。

内門は東面する一間一戸の薬医門（やくいもん）で、切妻造棧瓦葺の南北棟である。控柱は足固貴、腰貴、頭貴で固め、大斗肘木（だいとひじき）で受けた男梁（おうつばり）上に笈形付大瓶束（おいがたつきたいへいづか）で棟木（むなぎ）を支持する。軒は一軒繁垂木（ひとのきしげだるき）、大棟は組棟（くみむね）とする丁寧なつくりの門で旧家の格を示す。建築年代は主屋の座敷改修と同時期の大正前期と推定される。

(4) 登録基準

- 一 国土の歴史的景観に寄与しているもの



位置図

(写真)



長鋪家住宅主屋外観



長鋪家住宅主屋内部 床構え



長鋪家住宅内蔵外観



長鋪家住宅内門外観



長鋪家住宅内門側面 妻側

2 山成酒造店舗兼主屋、離れ座敷、内蔵、蔵、東仕込蔵、西仕込蔵

- (1) 所在地 井原市芳井町築瀬字見瀬側
- (2) 所有者 個人
- (3) 概要 小田川西岸の集落角地に位置する。山成家は代々庄屋を務めた家柄で、第7代政右衛門が文化元（1804）年に酒造業を開始した。明治10（1877）年に火災により建物の大半を焼失したが、酒造業継続のため直ちに再建されたと伝わる。再建後、これまでに幾度かの改修を経ているが、当時の様子を残している。

店舗兼主屋は敷地南東に建ち、東面する二階建切妻造平入棧瓦葺。外壁は漆喰塗で二階下部に海鼠壁を廻らす。内部は、中央北寄りには石敷の通り土間とし、北は帳場と洋室、南は瓶詰場と吹抜の倉庫とした、間口の長大な建物である。火災焼失後明治15（1882）年に再建された。

離れ座敷は敷地北側に建ち、平屋建寄棟（よせむね）造棧瓦葺とし南と東に下屋を付している。間取りは東西二室で、東室は座敷、西室は仏間としている。火災焼失後、大正4（1915）年に再建された。

内蔵は敷地中央に建つ家財蔵。二階建切妻造妻入棧瓦葺の東西棟で、離れ座敷と縁で繋がる。外壁は漆喰仕上で、下部はモルタル仕上。各階東西二室で一階は板敷、二階は畳敷で竿縁（さおぶち）天井を張る。明治後期に建てられたと推定される。

蔵は敷地南東隅に建ち、切妻造棧瓦葺の東西棟。外壁は軒まで塗込めた漆喰塗仕上とし、一、二階の下部は海鼠壁とする。内部は東西二室に仕切り、西寄りは土間で上部吹抜とした米蔵、東寄りは二階建で各階板敷の家財蔵である。火災後、近隣の星田村から移築したと伝わる。

東仕込蔵は店舗兼主屋の西に建つ二階建切妻造棧瓦葺の南北棟。大正後期に北に試験室を増築。外壁は漆喰塗仕上で下部をモルタル塗仕上とする。一階内部は広大な土間で、中央上部を吹抜として、貯蔵タンクを並べる。明治前期に建てられたと推定される。

西仕込蔵は敷地西端に建つ二階建切妻造棧瓦葺の南北棟。昭和中期に南に増築し、全体で長大な建物となっている。外壁は漆喰塗仕上で下部は縦板張とする。内部は、中央西寄りの麴室以外は間仕切を設けず、広い作業場としている。東仕込蔵と同時期に建てられたと推定される。

- (4) 登録基準
- 一 国土の歴史的景観に寄与しているもの 店舗兼主屋、内蔵、蔵、東仕込蔵
西仕込蔵
 - 二 造形の規範となっているもの 離れ座敷



位置図

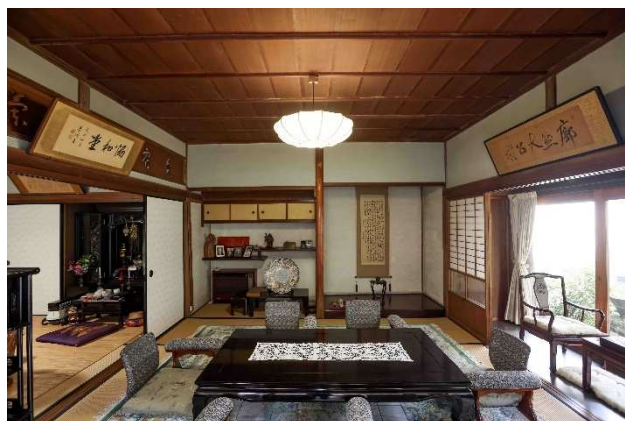
(写真)



山成酒造店舗兼主屋外観



山成酒造離れ座敷外観



山成酒造離れ座敷東室内部



山成酒造内蔵外観



山成酒造内蔵二階内部



山成酒造蔵外観



山成酒造東仕込蔵外観



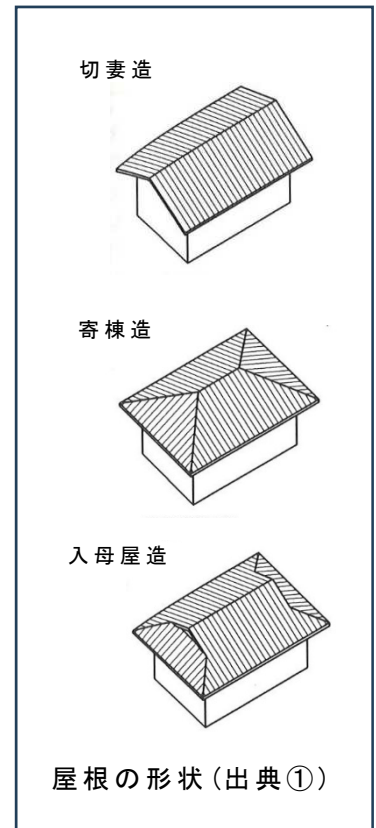
山成酒造西仕込蔵内部



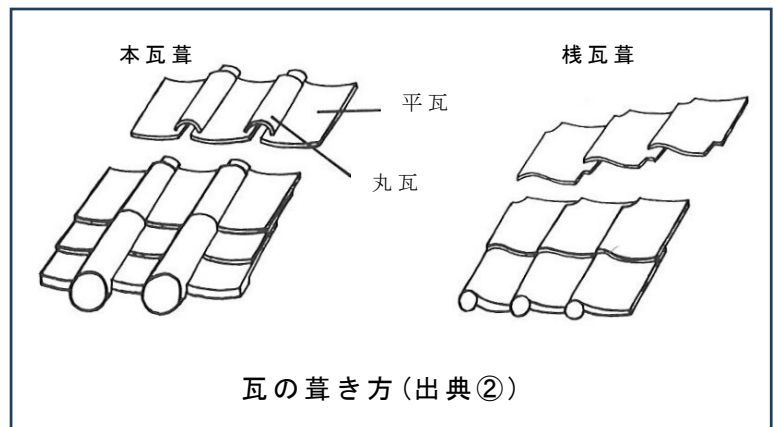
山成酒造西仕込蔵外観

【用語解説】

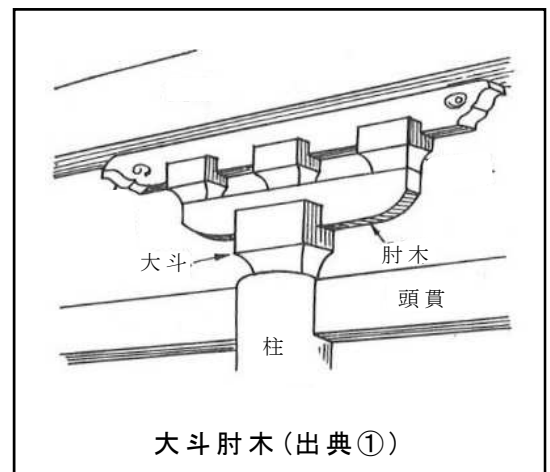
- 切妻造（きりづまづくり）：棟から両方に葺き下ろした、二つの面からなる屋根、あるいはその形の屋根をもった建物。
- 寄棟造（よせむねづくり）：四方に流れる屋根のうち棟を持つもの。
- 入母屋造（いりもやづくり）：寄棟造の屋根上部に切妻（きりづま）の小屋根を合わせたような形状の屋根の造り。
- 本瓦葺（ほんかわらぶき）：平瓦と丸瓦を交互に用いて葺いた屋根。
- 棧瓦葺（さんがわらぶき）：横断面波形の瓦で葺いた屋根。
- 下屋（げや）：本屋の外壁に接して設けられた片流れの屋根、またはその下の空間。
- 海鼠壁（なまこかべ）：土蔵造りの建物外壁仕上げ方法の一つ。方形の平瓦を並べて釘止めし、目地に漆喰を断面海鼠形＝半円形に盛り上げたもの。



- 薬医門（やくいもん）：中世に武家又は公家の屋敷などに現れた門形式の一つ、後に城郭や社寺、さらには民家にも使われるようになった。

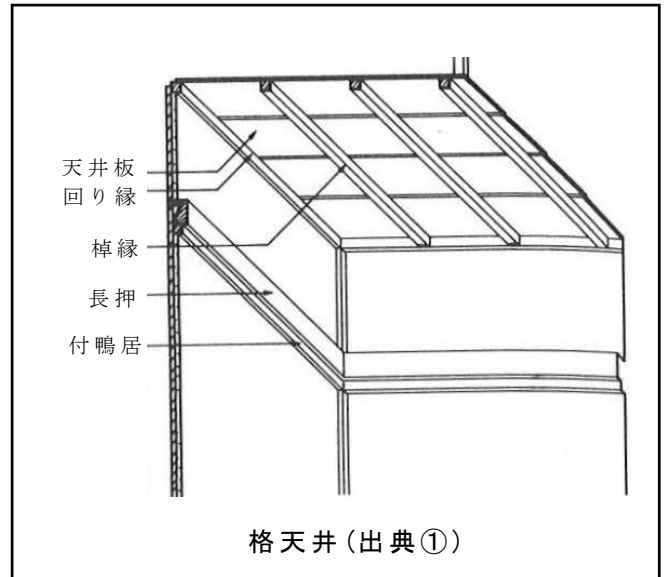
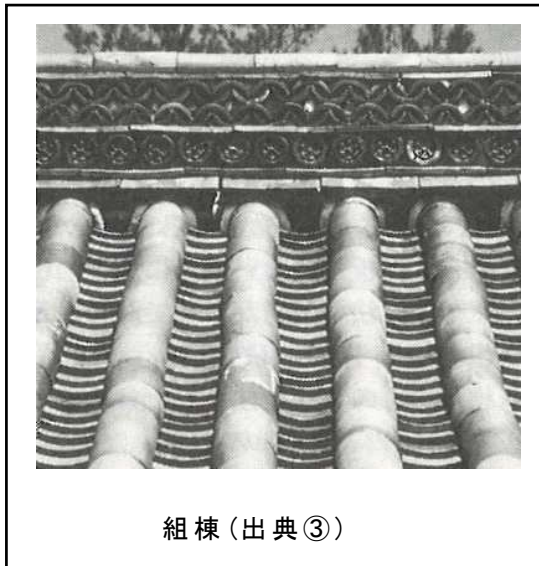
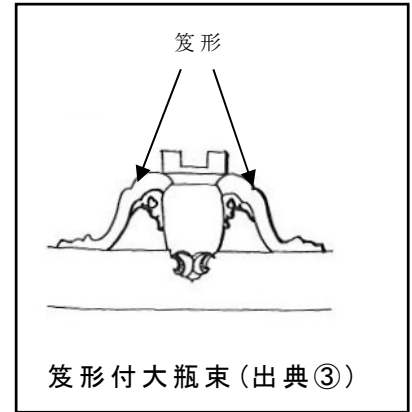


- 貫（ぬき）：柱同士をつなぐ横木で、場所・用途によって足固貫、腰貫、頭貫などと呼ばれる。
- 大斗肘木（だいとひじき）：肘木とは上部の荷重を受ける横木で、形状や使用箇所によってさまざまに呼ばれる。
- 笈形付大瓶束（おいがたつきたいへいづか）：妻に使われ棟木を支える円形の束で、形状が下



方ほど細くなり、瓶子に似ているので、この名が付いた。
 両脇に装飾として笈形と呼ばれる彫刻を付けたもの。

- 男梁（おうつばり）：門柱上部の桁行に2重の梁（横木）が出ているときに、上に位置するものを男梁、下にあるものを女梁（めばり）と呼ぶ。
- 繁垂木（しげだるき）：密に並べた垂木。
- 組棟（くみむね）：青海波、輪違いなど棟込み瓦を棟の上下の間に組み込んだこと。
- 棹縁天井（さおぶちてんじょう）：棹縁と呼ばれる細い材の上に張った天井。



出典① 小林一元・高橋昌巳・宮越喜彦・宮坂公啓編著 1997 『木造建築用語辞典』 井上書院

出典② 文化庁歴史的建造物調査研究会編著 1994 『建物の見方・調べ方 江戸時代の寺院と神社』
 きょうせい

出典③ 武井豊治著 1994 『古建築辞典』 理工学舎

出典④ 彰国社編 1993 『建築大辞典第2版』 彰国社